

亞爾然丁時報

文藝附錄

第六卷
第四十二號



Año VI, No XLII

生首葬送

七子

踏み出す足は鈍重な感覚の捕虜であつた。息づく肩は疲弊にぐったりとし、背負つた大きな包の結び目に引つめられた胸はくら／＼と眩暈でもしうな息苦しさで感嘆された。拭つても拭つても滲み出す汗の噴水にぐ／＼と濡れた。単衣は遠慮なく密着する埃によ／＼と濡れた。なからムツとする悪臭をさへ誘つてくる。タネの挿入した都下の夕刊に、ペーシ埋めの題材を提供する珍らしい殺人の酷刑が毎日続いた。七月木の或る日の午後、乾物行商人のお清は、府下砂町のバラック長屋のたてこむだ貧民街の熾烈な蒸気に蒸されながら、当てもなく軒並を漁つてゐた。

「もう何時頃が知らぬ？」

緩ら／＼傾いた陽脚を見上げたお清は、被つた手拭の端をちよいと持ち上げて下駄屋の店頭を覗きこむ。……と、彼女の瞳孔へ、樹時計の字盤がくる／＼と白い波紋を旋回して店いっはいに拡大されて、掩ひがぶさつた。刹那にお清は軒下へ昏倒した。

「口に「わちの賣り」と呼ばれる然した関西の喰ひ詰めて流れこむ、莫連女連中とは異つてお清は、未だ年齒も若く、通りすがりの暇潰しお店の主婦などが羨しうに振返つて見るだけの整つた顔立ちの持主だつた。唇月近い大きな腹を

抱えてゐた二ヶ月前、締ぎ手の亭主に死なれた。さういふの困憊に健康を害ねて廿日余りも床に就いてゐた。六才と四才になる女の兄に取巻かれて赤貧が日増しに肉迫する病床では、死産をしたと聞かされてもそれを心から憐れする母の心を滅却して、ホツと愁眉を聞くほどの果敢さだつた。世話になつた近隣の乾物屋の主婦に奨められた。彼女がわがめ賣りに化けたのは漸々四五日前からのことである。

締ぎ込まれた下駄屋の一角で落着いたお清は、また高い籠包を背負つて其処を出たのは、未だ陽の高い五時前だつたが、けだるい躰はもう商のふぶに、かまけてゐられぬ程だつた。彼女のお身の上話を聞いた人の好さそうに下駄屋の主人が、彼女の子供を一人貰ひたいと執心したことなど、離す気は無かつたが、それでもどうにかしたら入位おは貰はれても、と思つたりした。彼女は本所の割下水の傍の長屋で終日待ち暮してゐるだらう、幼いお文とお主のいぢらしい姿を描いてみた。それにしても、もつと可愛つてやらねばならぬ。悲痛な母性愛は、又、お金の問題へ立返へらねならなかつた。然らして倦い躰にも商意識が燃え立つた。

お清はそれと目星の家へ頼みを出しては、素直な胸に、通りを離れた一軒の家で多勢の賑やかさ話し声が漏れた。屈竟お賣場と元氣よく、お、みんなども買ふよ。

出鱈目の逐串でも嬉しうつた。

用を足して三足三足踵を返したとき、靴先が何
ッ知ら反響性のもに打つ突つた。無難作に
新聞紙でくるむだ物を山本は何気なく蹴返した
と、薄明りの土間に女の生首がコロリと轉び出し
た。

x x x x

山本の急訴によつて時を移さず取付けた砂町警
察署の一隊に、以下五名の不逞鮮人は一人残らず
捕縛された。
証物物件と共に其筋へ運ばれたお清の生首は、
三日の後、彼女の肉片を喰まされた山本の請願
に依つて彼の手に渡つた。
その日、首だけを収めた棺桶のさびしい葬列が谷
中の墓地を指して進んだ。

附記——是は小説ではありません。昨年七月
府下砂町で行はれた惨劇の実寫です。どうし
たことか、其筋の禁に違つて新聞紙にも發表され
なかつたので、ちよつと皆さんに御話したまでで
す。(七子)



詩と歌

街の一風景

ひがれんえい

街を行く
脂肪過多症の女の腰を、
そのエロティックにのたうちかへる
曲線の波を
よくよく透かしてみれば、
あ、そこには若き失業者の
見るも無惨な溺死體が一つ
浮きつ、沈みつ。
流れてゐた。
とは
ふんて、ドラマチックな
街の一風景でせう。

— ENZO —

短歌

Rosary

京太郎

夏瘦せど君がゆえに

怨み言

寫眞に添えてはるくまつる

七月を七度つづけて

怨み言

おこせし君をあはれ忘れ得ず

夏はれば

身の衰弱を歎くとも

夢ふ怨ぞ男ころは

わが爲めに

まこと歎ける君ありと

思へば涙はかなげに落つ

ナランへの酔ゆきに似たる

かこち言

破き捨てにし文反古を見る

この頃は心弱り

夕まけて散る病葉にうへ

涙するわれ

たまらぬのおとすれなれば
いとせめて
心ざしきわれを泣かせよ

夏の日記

蘇南

血色に浮んだ夕焼に描寫され

ニンと若い顔々が微笑んで

バルコニーから朗らうふ笑声が流れ出た

蒼白な千もの顔が登みかけると

青春の誰もがほんの少し音を吸ふ

と若い娘の唇が紫色にわなわいてゐる

すみわたつた星が蚊女のやうに輝く頃

遠くもの接吻がガーンと音にひびく

空を縫ふて美香がサッと頭を掠める

— ENEROON —

日本女流文壇の昨今

花なればこそ「赤い」?

明治の紫式部と記された樋口葉女史に宛てて、
数年前は中絶時代であつて、時々小説壇に雪嶺夫
人三宅花圃女史の名は見えたが、甚だ微々たる
巻きにして敬壇に名を連ねてゐるに過ぎなかつた
明治の後期に入つて文壇が一革命である自然主義
の勃興につれて急に色めきたつた雑誌ジャナリ
スムの混死相につけ入つて多くの女流作家が簇出
した。當時は小説に女流佐藤露英の後身田村
俊子と総帥として岡田八千代、大塚桐子、野上
八重子、小寺菊子、岡田治子、小栗かつ子、面々あり、
戯曲に長谷川時雨、評論には「泉始時代」は平陽
であつた。と標榜して女人覚醒の烽火と挙げた平
塚密鳥、尾竹紅吉をめぐる「青鞥」一派があつて頗る
華々しい活躍を見せたものだったが、稍脱線の観が
あつた自然主義が凋落して、文壇の空気が一掃さ
れると共に線香花火に寂れてしまつた。(と云つ
ても女流が自然派だつたのではない)

それが近年、オニ革命とも見るべきマルクシズム
文学の抬頭で、またもや活氣立つたジャナリズム
の混線が奔流の勢で女流作家の進出を齎らし
てきた。それは既に昨の「国秀作家タイプ」ではな

い「フライパン」や「エプロン」を労働歌とペンに代え
た長髪鬘士の血みどろぶ桃戦の観がある。
それにしても「イデオロギー」物は藝術の脱線であ
り一九三〇年中期あたりから一般文壇も花壇派作
品に倦怠の色を見せ、それに対抗すべく「純藝術
派」を生れたほどであつた。それら新進女流の
轉換如何は女流文壇の隆凋を暗示する興味あ
る問題であるが、近着の「赤い」は彼女達の「現状維
持」はあつたが、より旺盛な「赤い」への行進曲振りを
傳へてゐる。

萬紅時代とは云つても最密に云へば二つの異つ
た脈派を汲むのである。
一はブル派とも謂ふべき野上野子、三宅やす子、
中條百合子諸氏の如き、廿年間も作品を発表して
きた人達で、それに宇野千代、さき、ふさ、吉屋信
子諸氏が加はる。他は平林たい子と中室とした
ハロ派で、中本たか子、松田解子、岡田種子などの
諸氏である。宇野上野子は例の堅実な手法で
「野子もの」で左翼に轉換するハチブルの心境を
肯定的に描いてゐるし、三宅やす子は一種の虚無的
自由主義とでも云ふべき態度があり、近くロシヤ
から帰る中條百合子が「赤い」物を書くであらうこ
とは疑ひもない。宇野千代はエロ方面へ逃避して
ゐる。吉屋信子一人通俗小説に首をうつ、こんである
のみで、平林たい子以下の暴露派が活躍してゐる
現在では、左傾は女流文壇の全体的傾向と観
られるだらう。

これは「女へ藝術」が文壇に送り出した中本たか子、林美子、戸田豊子、松田解子、並「戦後」の空川いね子、「文藝戦線」の山本和子、モダン派とも謂ふべき岡田穂子あたりの作品が、ジャーナリズムの利用するところとなり、(連中)に言はせれば、ジャーナリズムと利用して、洪水的に文壇に進出し、来た、所謂既成作家連が方向を見失ひ、こへ女性の衝同性が作用して大勢順應に傾いた結果と見られる。

「女へ藝術」を擁する新進作家は実に多士、荷々である。大谷藤子、木田洋子、後藤かつ子、川瀬美子、藍川洋子、高橋鈴子、葵いつ子、平林英子、手塚いづれも筆が立つて、而も揃つて大端的である。その「女へ藝術」も、大衆小説家三上於菟吉氏が「エロ洋気のいひわけ」に、夫人時雨女史に贈る資金によつて経営されてゐるふとは皮肉だが、それだけに常に経営難はひびいて、少ふからぬ惨苦と闘ひつ、新らしき芽生を培つてゆく長谷川時雨女史の功績は特に銘記すべきものであらう。

別に歌人今井邦子、茅野雅子、若山喜志子、詩人深尾須磨子の諸氏はあるが、何れも女流文壇の主眼とは云へない。が、今井邦子はモダン座談会の名士であり、お厂々株の評論家山川菊栄、神匠市子、超赤派であり、生田花世も、蒼白き大春月が瀬戸内海の藻屑と消えた後は、労働者のやう

に骨組のがつじりした、幻しの恋人を頻りに「夢みてゐる……」となると、女流畑の花翼轉向は定説の定説らしい。文壇ではマルキシズムが漸く露につき出した今日此の頃、女流文壇が一斉に「まわれ左」とは、どうしても女は男より一歩後れてゐる……」など、云つたら叱られるが。



「だから言はん事ぢやない——」
 女「アアア、送つて下さつた詩をお父さんに見せたのよ、大変喜んでたわ」
 男「どうですか！ 何と云つておられましたか？」
 女「お前も詩人と結婚するんぢやないかと判つてこんな嬉しい事はなかつた」

—— 断髪餘聞 ——
 母「アア、長い髪して！ 今日床屋さんに連れてつておろさせよう。男の子、いやだ！ 女みたいになるな、あいやだ！」

—— 女ははじめ ——
 六才になるP子「チヤン、母ちゃん、女の人ぢやないも先にするの？」
 「さうです。」
 「ちや、どうしてあつた兄さんより後に生れたの？」

—— 不良長壽 ——
 若い男、安懐に志をしてゐる。「僕らの女を束縛してゐるんです。束縛してゐるんです。僕等の結婚を許して下さい。」父「駄目だよ。俺が若かつた時分にもあんな女に熱くなつた事がある。」

詩

恋狂曲

蘇南

短歌

病床に哭く

富見子

勇敢なる騎士よ
月光に青ざめた槍もつて
彼女の小さい心臓めづけて
サシと一むら打て

お、白馬は勇みきつてある

真紅の唇と唇よ赤夏のように
高鳴る心臓の破裂するまで
血に燃えた太陽のかけらまで
唇よ心の断崖は峻だ

歪んだこの魂をえぐり抜いて
君よその美唇を磨いてくれ
心臓よ調子よく鼓動をうて
肺臓よ血の廻轉を力づけてくれ

心の虫よガツチリとしやみつけ
震へる彼女の桃色の胸に
その鍵を死物狂心に挿んで
心臓の鼓動が止むまで
お、その胸を永遠に握りつぷせ

一九三二・一・一七

永久に癒ゆることなきこの病

ふと思ふとき涙こぼれし

故郷の母は如何にやおはすらん

妹が文たてて久しけれ

儼びしきは病みつかれたる枕辺の

小夜床にきこほろろの声

その君の行方は知らねうつしきは

形見となりて物思はする

病むゆえかわれキリストに祈れども

昔の夢をかへすすべなし

今にして君が心をたしりぬ

幼ふかりにし我を悲しむ

一九三二・一・三一

